

甲子園学試論

玉置 通夫

Study of Koshien Ballpark

TAMAKI Michio

Abstract : Koshien, that was built in 1924, is the oldest ballpark in Japan. But, its character is not only historical, but also associated with the locality and society, etc. In Koshien, there are many academic problems to research and explore. There is also an issue in that there is very little data about its early days. Men and women who knew it as players or the audience, grew now older, and are about 90 years old, so to collect the data is a race against time. It is very difficult for us to discover new data. It is the source of trouble, so to overcome this crisis, it is necessary to set up The Koshien studies.

1. はじめに

阪神甲子園球場（以下甲子園）は、1924（大正13）年8月1日、兵庫県武庫郡鳴尾村西鳴開（現西宮市甲子園町、以下鳴尾村）に開場した。現在、全国には大小合わせて200以上の球場があるが、その中では、最古の施設である。しかし、甲子園は単なる古さ、つまり歴史性だけが特徴ではない。地域開発、高校野球、プロ野球、時代性、社会性などのほか、女性とスポーツ、祝祭空間、色彩心理学、応援と言う連帯感といった多くの研究テーマができる可能性を秘めている。単なる野球場であるが、野球場としての分析だけではつかみきれないものが、甲子園にはある。これだけ多くの発信情報を持った球場は、甲子園においてはほかに見当たらない。それが、研究テーマとしての「甲子園の魅力」であることは、間違いない。

2. 魅力进行分析する

その理由は、なんだろう。第一の要素は、大衆消費社会という現代社会の原型ができた大正から昭和、平成にいたる継続した時代性だ。その間、戦争もあった。まさに、激動の中を歩んできた施設と位置付けることができる。だから、それぞれの時代にかかわった

人たちの思いも、多種多様で変化に富んでいる。

第二は、地域に密着した施設であり、村外れのさびしい場所に建設されながら、村全体の活性化に貢献した。村は大正時代になると、工場誘致¹⁾をしながら、観光農業や娯楽施設、言い換えればソフトパワーによる活性化を進めた。この阪神電鉄を巻き込んだ開発方式は地域開発のモデルともなり、以後全国に波及した。

第三は、中等学校野球や阪神タイガースとの関係があげられる。現在では風物詩となっている春夏の高校野球大会は、大正年間に朝日と毎日両新聞社のライバル争いから始まったものだが、その舞台として機能し続けてきたことは、甲子園のイメージを固めることに貢献した²⁾。さらに、戦後は、爆発的な人気を得たプロ野球の舞台としても認知されるようになり、阪神タイガースの本拠地として知名度を絶対的なものにした。

取りあえず、考えられる要素は、こんなところだろう。勿論、これらの要素は、複合的にからみあって、独特の情報発信を続けている。その中には、研究テーマがいっぱい詰まっている。今後、そのひとつひとつを掘り取って、分析、調査してゆきたい。

3. 甲子園研究の問題点

甲子園について研究する際、まず当面するのが、一次資料の少なさだ。甲子園の誕生にいたるまでの概略的な経緯については、阪神電鉄社史、全国高校野球選手権大会と選抜高校野球大会の両大会史、鳴尾村誌に詳しい。しかし、具体的な事象に関しては、はなはだ抽象的表現が目立ち、確認を取ることは至難である項目が多い。

たとえば、甲子園という名前の由来、命名日はいつなのか、甲子園が4ヶ月余で完成した理由などについては、はっきりとした一次資料が残っていない。阪神電鉄の役員会等の資料が戦災で焼失したこともあって、伝聞的な資料に頼らざるを得ないのが実情だ。甲子園の名物となっている芝生やツタ、カレーライスに関しても、当時を知る人たちから聞き取り調査をするのが、唯一の一次資料の発掘と言っても過言ではない

ところが、当時を知る人たちは、少なくとも90歳以上の高齢者だ。物故者が圧倒的に多く、時間との勝負と言うことになるが、生存していても、取材に耐える人は、きわめて少ない。私が証言集めを始めた1985年ごろは、かろうじて建設当時の様子を知る人¹が生存しており、その際に集めた話は、最後の一次資料といえるだろう。

しかし、そのような状況であるからこそ、甲子園研究の最適なアプローチ方法は、逆に闡明となるはずだ。つまり、当時を生きた人たち、係わり合いを持った人たちに対する直接取材、フィールドワークが有効であり、とりもなおさず、地域文化論の原点ともいえる手法によって、今後の研究を深化させなければならないのである。

4. 甲子園の登場

甲子園誕生には、いくつかの伏線がある。まず、武庫川の洪水対策。武庫川は、現在の甲子園の東約2^{km}にある川だが、江戸時代以来、洪水を繰り返す「暴れ川」として有名だった。このため、明治時代になると、鳴尾村を中心とした下流域の各町村は、洪水対策に頭を絞る。1911（明治44）年には「武庫川改修調査委員会」が発足した。そして周辺6町村による話し合いが盛んに行なわれ、13年には、「現在の武庫川を廃川にして、支流の枝川と申川を本流にしよう」と言う鳴尾案がだされたが、各村の同意が得られず、こ

の案は結局、廃案になってしまう²。

歴史上の事象に対し、「もし」といった結果とは異なる要素を加味することは、余り意味のないことだ。しかし、あえて「もし」と言う語句を言ってみたい衝動に駆られる場合もある。甲子園の場合も、そのひとつだ。もし現在の武庫川が廃川になっていたら、どんな展開になっただろうか。勿論、甲子園は現在の場所ではなく、阪神電鉄武庫川駅の周辺も現在とは全く異なる風景になっていたにちがいない。

結論が出なかった武庫川改修計画は、20（大正9）年、阪神国道の拡幅改修工事とリンクする形で動き出した。兵庫県は、国道工事に絡め、武庫川を生かして枝川と申川を廃川、道路化することに決めた。その背景には、第一次世界大戦の戦勝国となり、満州（現中国東北部）を含む中国大陸への権益増強をもくろむ政府、軍部の展望があったことは間違いない。国道の拡幅工事は、物資の輸送に役立つだけでなく、戦車の通行能力が増えるうえ、航空機の離発着にも供するなど軍備力の強化と密接に結びついているからだ。

ともかく、県の方針が決まると、埋め立てられる枝川と申川の河川敷³が民間に払い下げられることになった。そこで、すぐに動いたのが、阪神電鉄だった。同社は、当時社長が不在で、専務の三崎省三が社務を取り仕切っていた。三崎は米国・パデュー大への留学経験があり、体格の良い大男たちがスポーツに興じる様を見て、日本国内でも本格的なスポーツ施設の必要性を痛感していたようだ。三崎の英文で書かれた日記にも、野球場の図とポジションを書き込んでいる。三崎にしてみれば、総合的運動場を中心としたレジャー施設の建設は、悲願でもあったのだ。

しかし、同社内には、三崎の仕事ぶりを快く思わない人たちも結構いたようだ⁴。さらに洋行が重たい意味を持っていた時代だけに、アメリカ帰りの三崎に対するやっかみも増大していたと推察される。おまけに、約73万9200平方^mの河川敷の払い下げ価格は、410万円で、資本金（2500万円）の六分の一に相当する金額だった。いわば社運を賭けた買い物であった。いくら住宅地開発とリンクさせても、事業として成り立つものなのかは、議論の分かれるところだ。積極的に足をひっぱらないまでも、消極的な意見も多かった。そんな中、「河川敷跡を買収して運動場を作る」ことを実行に移したのは、三崎の情熱そのものだった、と言っても過言ではない。当時の阪神電鉄関係者は、「どちらかと言えば強引な人だった。だからこそ、破天荒な計画も、実行に移せた」と口をそろえ

る。

さらに、甲子園誕生を後押ししたのが、中等学校野球熱だった。明治時代末期から盛り上がりを見せていたが、1915（大正4）年に全国中等学校優勝野球大会（現在の夏の高校野球大会）が始まると、さらに火がついた状況になった。1919年に神戸一中が優勝したあと、関西学院中、和歌山中（2連覇）が優勝し、ファンが鳴尾運動場⁷⁾に殺到。十分な観客席もないため、ファンを裁ききれなくなった。このため、阪神電鉄は22年、米国の鉄道事情を視察中の技師に大リーグの球場の設計図を持ち帰るように指示、技師はニューヨーク・ヤンキースの本拠地だったボログラウンドの設計図を持ち帰った⁸⁾。本格的なヤンキースタジアムが完成するのは、翌23（同12）年4月のことである⁹⁾。

当時、国内には本格的な野球場がなかった。陸上競技場のトラック内に線を引いて野球をするのが一般的であり、観客は粗末な簡易の木製席か直接土の上に腰を下ろして観戦した。しかし、このような施設では、とても殺到する観客を裁き切れず、球場建設は焦眉の急となっていた。このため、三崎は、23年春、入社2年目の技師・野田誠三に設計図作りを命じた。さらに、5月に「建設検討委員会」を組織し、外部の野球関係者の意見を求めた。

果たして、この委員会でどんなことが話し合われたのか。場所は中央電気倶楽部、毎週のように開催したことは、野田や委員の証言ではっきりしている。しかし、残念ながら、内容については、中央電気倶楽部も火災により当時の記録を失っており、記録した資料は全く残っていない。わずかに、委員の一人だった小西作太郎の証言¹⁰⁾があり、会議の様子が少しわかった程度だ。

5. 甲子園の命名

23年の全国中等学校優勝野球大会は地元の甲陽中が優勝したため、観客のフィーバーぶりはすさまじく、いよいよ、球場建設を実行に移さなければならなくなってきた。しかし、建設を役員会で決定したのは、11月28日だ¹¹⁾。大会が終わってから、3ヶ月も経っている。いくらなんびりした時代だったとはいえ、これでは余りにも時間がかかりすぎている。おそらく、社内の反対派を切り崩すために時間がかかったのだろうが、この疑問を解くための材料は、ほとんど残っていない。9月1日に発生した関東大震災の影響

も、無視できないだろう。だが、阪神電鉄、ひいては関西の建築業者たちが、大震災のためにどんな影響を受けたのかは、実証する資料が皆無と言ってもよい状況だ。

ともかく、球場建設の地鎮祭は、翌24年3月11日に行なわれた。工事の準備に3ヶ月以上かかったと言うことだが、この間、甲子園の名称がコロコロ変わっている。役員会で建設が決定した際、三崎の日記には「枝川グラウンド」の記述があり、1月7日の同日記は「鳴尾グラウンド」。10日後の大阪毎日新聞をみると、「阪神運動場」となっており、この時点では「甲子園」とは言わなかったようだ。そして、ようやく三崎日記に甲子園の名が登場するのは、2月6日である。このようにしてみると、最初は埋め立てた川の名であり、さらに地域名、電鉄名と変化し、甲子園に落ち着いたことがわかる。

ちなみに、「甲子園は最初、紅州園（ベニスえん）と呼ばれた」との記述が、インターネットにある。そのような言説を流布させている学識経験者に会ったこともある。しかし、これは、全くの誤解によるものだ。紅州園は、浪速土地という企業が大阪市の旧淀川敷地に計画した遊園地で、1913（大正2）年、阪神電鉄に業務提携を申し入れてきた。つまり、遊園地までの鉄道を敷設し、紅州園に来易くすれば、お互いの利益になる、との考えだ。しかし、翌年になると、浪速土地と関係が深かった北浜銀行で取り付けが始まり、浪速土地の経営環境が流動的になった。このため、同年、契約の解除が行なわれ、遊園地構想は幻に終わった¹²⁾。紅州園は、甲子園と場所、時期ともに異なる別施設である。

甲子園のネーミングは、大正13年の十干が甲（きのえ）、十二支は子（ね）であることから、名付けられた。これは野田らの証言から信用できる事実と言ってよいだろう。しかし、いつ、誰の発案で決定したのかは、謎のままとなっている。電鉄社員の意見を聞いた上司が幹部に上申した、いや教養のある役員のアイデアだと言う説もある。いずれにしても、役員会の議事録が焼失しているため、正確なことは不明だが、球場名の変遷を合わせて考えると、2月前後に決まったと類推することができる。

6. 建設にも謎

実際の工事は、7月31日までの約4ヶ月半。工事を受注した大林組によると、当時と比較にならない技

術力を持つ現代でも、完成には1年を要すると言う。それならば、なぜこんな短期間で工事が終了したのか。これも、資料にはない大きな疑問だ。

その謎を解くため、いくつかの可能性を探ってみたい。

まず考えられるのは、労働環境だ。当時の義務教育年限は、尋常小学校卒業。中学校への進学率は全国で13.9%¹³⁾しかなく、労働力として活用できる人材は豊富だった。また、労働基準法や児童福祉法もなく、徹夜作業を辞さない労働者も多かった。工事は昼夜兼行で行なわれ、現在のような日祝日休業もなかった。

さらに、現場の地政的環境も作用したのではないか。鳴尾村西鳴開は村はずれにあたり、周囲に人家などのない寂しい場所だった。このため、工事に伴う騒音や夜間作業のライト、臭気などを気にする必要は、全くなかった。とにかく、自由にどんどんと工事を進めていけばよかったのだ。

もうひとつ、偶然ながら工事には有利に作用したと思われる要素がある。それは、空梅雨だ。工事が佳境に差し掛かる6月から7月にかけては、例年ならば梅雨による雨の影響を受けやすい時期だ。いくら突貫工事をやりたくても、雨で工事が中断することは、十分に考えられる。ところが、この年は雨が少なく、野田のまとめた工事報告書によると、3月11日の地鎮祭から完成する7月31日までの143日のうち、晴天は実に101日もあり、終日雨にたたられたのは12日しかなかった。つまり、作業を完全に休まなければならなかったのは、わずか7日だけしかなかったのだ。周辺の農家では、「早魃で水の確保が大変だった」との証言¹⁴⁾も残っており、雨が極端に少なかったことを裏付けている。

7. なぜ、すぐに満員になったのか

甲子園が完成して約2週間後の8月13日、第10回全国中等学校優勝野球大会が開幕した。新装成った球場は余りにも大きく、初日はガラガラだった。三崎は「いつになったら満員になるんだろう」と心配顔だったが、なんと3日目に満員になった。

その要因はなにか。その日は土曜日のうえ対戦カード¹⁵⁾がよかったということも、無視できない。だが、もっとほかの要素があったのではないか。もちろん、この点を書き込んだ一次資料は、見つかっていない。しかし、角度を変えてみると、問題の回答らしきものが見えてくる。

それは、球場の施設が珍しかったからだ。そのひとつは、水洗トイレ。当時、自宅に水洗トイレがある人は、ほとんどいなかった。いわゆる汲み取り式が、大部分だった。ところが、甲子園のトイレは、水洗だった。球場に押しかけた観客にとって、初めてみるもので、まさにカルチャーショック。試合前、腹具合が悪くなった選手が用を足したものの、どうやって処理したらよいかわからず、ぶら下がっていた鎖を引っ張ったところ、勢いよく水が流れたため、てっきり壊したと思ったというエピソードが残っている¹⁶⁾。

もうひとつは、食堂だ。運動場のような施設に食堂があるのは新鮮で、たちまち話題になった。とくに、カレーライスとコーヒーは、目玉商品にふさわしい人気ぶりだったと伝えられている。当時、カレーライスは、現在のように簡単に食べられるものではなかった。元となるルーが市販されておらず、洋食レストランで味わうものだったからだ。そんなカレーが球場で食べられるのは、画期的であり、観客の口の端に上らぬはずはなかった。たちまち「甲子園のカレー」として評判になり、まだ世間一般的に十分に普及していなかったコーヒーとともに、斬新さが観客たちを捉えた¹⁷⁾。

言い換えれば、甲子園は、最先端に行くモダンな建物だった、といえるだろう。特に新しい物好きな神戸や大阪、京阪神の人たちにとって、甲子園は、国内初の本格的な野球場と言うだけではなく、魅力にあふれた風俗スポットと位置付けることも可能だろう。それが、一躍満員になった間接的な要因ではないか。いくら野球熱が爆発していても、すぐに満員になるとは到底考えられない時代だけに、建物としての魅力が、大きな要素と考える方が合理的だろう。

8. ツタ、芝生の社会性

再三指摘しているように、球場を特徴付けているツタや芝生、観客席の色彩などについて、歴史的な流れを踏んで叙述した資料は、皆無といってもよい。それは、球場の通史が作られていないための負の側面だが、断片的な資料を根気よく、つなぎ合わせる作業を進めなければならない。そうしなければ、甲子園学としての展望や拡張、深化を望むことが困難になってくる。それは、単なる根気だけの問題ではなく、一次資料が刻々と姿を消していると言う現実との戦いでもあるからだ。

ツタが球場の外部壁面に植栽されたのは、開場した

24年12月ごろと類推できる。それは、野田の日記に業者との打ち合わせを示唆する記述¹⁸⁾があり、野田からも植栽にかかった話を聞いたとの証言¹⁹⁾も重ねての推察である。また、なぜツタを採用したのかと言う点については、野田が「ヨーロッパの古城とツタをイメージした」旨の発言²⁰⁾をしており、まずそのとおりだろうし、ツタは直射日光を避けるのには最適である。河川の跡だけに地下水が豊富で、ツタの成長にも適した環境だ。

芝生も、当時作業を担当した人からの直接取材²¹⁾によって、29(昭和4)年3月ごろまでに植えられたことがわかっている。これは、ほぼ定説としてもかまわないであろう。それまでは、所謂、ベアグラウンド(なにも植えられていないグラウンド)だったが、クローバーのような草はあり、ところどころで密生していた。そのあたりの証言は、電鉄職員や実況放送を担当したNHKのアナウンサーから記録されている²²⁾。

ツタと芝生は、ともに色鮮やかな緑だ。色彩学的に言えば、寒色系に属し、見る人の気分を落ち着かせ、沈める効果があると定義されている。勿論、そんな効果だけを考えて植えたわけでもないだろうが、結果的に見て、観客に対する「癒し効果」は十分だ。おまけに、2008年から内野席がアイビー色になり、ますます気持ちを落ち着かせる空間になっている。

このようにみると、甲子園が球場と一言で片付けてしまえない多くの要素を孕んでいることがわかる。ツタや芝生、観客席を色彩論の立場から、もっと深く論考できるのではないか。赤、黄、といった暖色系の色彩が多いタイガース応援団との関係、そのなかから醸し出される祝祭空間としての甲子園、日常性を否定して本来的な自己を取り戻せる場所と規定できる甲子園、全く知らない者同士が意を通じさせて孤独感や疎外感を払拭できる場所、などと定義して、それぞれの関係を研究することは、現代社会を解剖分析することとイコールと考えても良いのではないか。

9. 女性とスポーツ

女性とスポーツもキーワードに入るだろう。甲子園は歴史的にみて、女性との関連がある施設だ。1924年に開設すると、たちまち女性の姿が目をつけた。当時、盛り上がる中等野球熱に熱狂していたのは、なにも男性ばかりではなく、野球に(選手にといった方が的確かもしれないが)興味を持つ女学生も出始めているのだ。甲子園以前の鳴尾運動場では、観客席が粗末

なうえ、直接地面に座って試合をみるのは、男性たちの好奇の目にも耐えなければならず、かなり勇気のいることだった。

ところが、甲子園では、内野は椅子席が完備され、広いこともあって、男性の目を必要以上に意識しないですんだ。内野スタンドを覆った大鉄傘は、日焼けを気にしなくて済む格好の設備でもあった。つまり、女学生は先生に引率されたとはいえ、安心して試合をみることができた²³⁾。当時としてはモダンな洋装姿の女優が観戦していることを伝える写真や記事²⁴⁾も残っている。都会では、洋装、断髪で街中を闊歩するモダンガール(略称モガ)が注目を浴びていた時代である。甲子園の内野スタンドが時代の先端を行く風俗に席捲されたことは、甲子園の時代性、斬新性を物語っている。「新しい女」にとっても、甲子園は、自らのパフォーマンスを発揮できる場であったのだ。

いずれにしても、女性が甲子園、ひいては中等野球に興味をもちはじめたことは、野球の一般大衆化を促進したことと無縁ではない。昭和に入って、甲子園で活躍した選手たちはほとんどが人気絶頂だった東京六大学でプレーしてスターになったが、その原動力になったのは、女学生を中心とする女性ファンだった。スターの顔写真、とくにハンサムな選手のプロマイドは、飛ぶように売れた。また、「野球界」などの雑誌も好んで六大学のスターを取り上げたから、野球に関心を持つ女性も飛躍的に増えた。

当時、サッカーも全国の中高等学校や高等学校に普及し始めていた²⁵⁾。しかし、甲子園の出現は、わが国における野球とサッカーの人気の差を格別に大きくしたといえる。もちろん甲子園は野球だけではなく、サッカーやラグビーの会場にも使用されていた。しかし、サッカーやラグビーは冬季の競技と考えられており、試合数も野球より格段に少なかった。そのうえ、野球が大衆化して、女性ファンが激増したことは、一般的な人気と言う点から見て、サッカーファンとの大きな差になった。これは、あくまでも仮説にすぎないが、今後検討に十分値するテーマではないかと考えている。

10. 今後の課題

今後、甲子園をキーワードとした研究を展開させなければならない。そのための方策として、まず考えなければならないのは、中等野球や高校野球、阪神タイガースを中心としたプロ野球の観点からだけの球場史

に収斂しないことだろう。施設としての特異性は当然として、球場に関わった人たちの視点からの分析をすることで、甲子園を甲子園たらしめている「幅のようなもの」に切り込むことが可能になってくるはずだ。そこに、甲子園学の基本的な理念が存在する。今後、建築物としての甲子園から脱却し、地域や観客など甲子園を取り巻く表象を対象に据え、絶えず深化、分散する運動体として捉える視点が必要になってくる。それは、言い換えれば、表象を微分化したり、反対に積分化して行く営為が極めて重要であることにほかならない。

注

- 1) 1917(大正6)年2月に世界的商社だった鈴木商店(本店・神戸市)から豆油製造工場の建設を打診され、紆余曲折の末、1918年3月に鈴木商店製油部鳴尾工場が完成。この工場は、4年後、豊年製油株式会社として独立し、1970年に神戸市内へ移転するまで稼働した。
- 2) 春夏の大会は、1925(大正14)年から甲子園が舞台だが、夏の大会は、戦後初の1946(昭和21)年は甲子園が進駐軍に接収されたため西宮球場で開催。1958(同33)年の第40回と1963(同38)年の第45回は、記念大会で出場校が47、48と多く、西宮球場との併用だったが、せっかく出場したのに甲子園での試合ができなかった学校に対し同情の声が多く、第50回は甲子園だけで行なわれ、以後、西宮球場は使用されなかった。
- 3) 代表的な人物は、元朝日新聞大阪本社代表の小西作太郎氏。1983(昭和58)年9月19日に宝塚市内の自宅で取材した際、満91歳ながら健在で、球場建設前後の状況を詳しく知る最後の生存者だった。
- 4) 鳴尾村誌(2005年、鳴尾村誌編集委員会編)は「鳴尾村、武庫川改修株式会社双方の計画ともこれ以上進展することはなかった。田沢西宮町長は鳴尾村案の実現のために奔走したともいわれているが、当事者同士では解決策が見つからなかったのか、武庫川改修計画はいったん立ち消えになってしまった」(276頁)と記している。
- 5) 埋め立て作業について、郷土史家の大道歳男氏(故人)が83年9月21日と84年1月11日の取材に対し、トロッコを使った砂運びの様子などを証言している。
- 6) 三崎の4男、舞阪悦治(故人)著「甲子の歳」(1983年ジュンク堂書店)の「(27)黒幕はおどる169頁-175頁」参照。
- 7) 阪神電鉄が借りていた鳴尾競馬場の中に1週800mの陸上競技用トラックを持つ運動場が作られ、鳴尾運動場と称した。その内部のフィールド部分で野球を行なったが、2面取れた。
- 8) これを参考にして甲子園の設計図を作った(前出、小西作太郎の証言)。
- 9) 2008年のシーズン限りで閉鎖されるまで使用された。
- 10) (8)の取材で、かなり詳しく証言。
- 11) 三崎の英文日記に「wed Rainy, Directors meeting resolved on payment of 12.50 per share and yeda gawa ground」とある。
- 12) 阪神電気鉄道百年史(2006年阪神電気鉄道編=以後阪神電鉄)96頁-97頁。
- 13) 「日本の教育統計明治-昭和」(1971年、文部省編)
- 14) 84年4月25日に春風一区福祉協会長(当時)、浅井政一氏への取材。
- 15) 市岡中-北海中戦が目玉カードで、翌第4日は地元的第一神港商(現市神港)-早稲田実が人気の対戦だった。
- 16) 広島商や横浜商の選手の証言。
- 17) 当時としては、時代の最先端を行く風俗だった。
- 18) 野田の日記は、遺族が公開を拒否しており、全貌は不明だが、阪神電鉄社報(1984年10月1日発行)に掲載された阪神園芸常務取締役、北村博史氏の文章に「大正13年12月2日の野田の日記に『甲子園運動場の造園工事のため阪上深秀園(注・造園業者)来る』との記述あり」と記されている。
- 19) 元阪神電鉄社員、祖父江隆夫への取材(1983年10月13日)。
- 20) 同上。
- 21) 元阪神電鉄社員、稲葉梅吉への取材(1984年1月11日)。
- 22) 元甲子園球場長、石田恒信(1983年10月11日)と元NHKアナウンサー、魚谷忠(84年1月31日)への取材。
- 23) 全国高等学校野球選手権権大会史(1958年朝日新聞社編)82頁-83頁。
- 24) 全国高等学校野球選手権大会70年史(1989年朝日新聞社編)88頁。
- 25) 中等学校のラグビー、サッカーの大会は、1918(大正7)年に大阪毎日新聞により「日本フットボール優勝大会」として豊中運動場で始まった。現在は分離し、「高校ラグビーフットボール選手権大会」、「高校サッカー選手権大会」として花園ラグビー場(東大阪市)、国立競技場(東京)などの東京近郊競技場で行なわれ、人気を博している。